

## 第102回 三方限古典塾（'15, 4, 16）

### 洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3 - 19）

- 1 日既に暮れて、而も猶お烟霞絢爛たり。歳将に晩れんとして、而も更に橙橘芳馨たり。故に末路晩年には、君子は更に宜しく精神百倍すべし。 前集 197

（意識） 太陽が既に沈んでしまっから、山水の夕映えはますます美しく輝く。また、歳の暮れになると、だいたいやみかんなどの柑橘類は一段と芳しい香りを放っている。だからこそ賢明なる諸君は、人生の晩年に当たってこそ、精神を更に百倍にも奮い立たせて、よりよく生きられるように努めるべきである。

（余説） 「老いは自然の贈り物」は米国の絵本作家ターシャ・テューダーの言葉だそうです。ここでは、夕日の輝きと蜜柑の香りの例えを使って、人生の晩年のすばらしさとそのための奮起を呼びかけています。日が沈んでいくからこそ景色は艶やかに光り輝き、蜜柑が香りを放つためには厳しい寒さという試練も必要です。

人生に本当の味わいが見えるには、年を重ねることが必要です。体にはいろいろと不具合も出てくるかも知れませんが、だからこそ精神を奮い立たせ、人生の最後の輝きと香りを楽しみたいものです。良くも悪くも人生の総決算の時です。

（参考） 論語（季氏編）「君子に三戒あり。少き時、血氣未だ定まらず。之を戒むること色に在り。其の壯なるに及んでは血氣方に剛なり。之を戒むること闘に在り。其の老いたるに及んでは血氣既に衰う。之を戒むること得に在り。」

（血氣・つまり心身の盛衰に従ってそれぞれ女食、闘争、物欲に気をつけよ。）

- 2 鷹の立つや、睡るがごとく、虎の行くや、病むに似たり。正に是れ他の人を攫み、人を噬む手段の処なり。故に君子は、聡明は露わさず、才華は逞しくせざるを要す。纔かに肩鴻任鉅の力量有り。 前集 198

（意識） 鷹が木にとまっている姿は、まるで眠っているようであり、虎が歩く姿は、まるで病気にかかっているようである。だがそれは、まさしく獲物におどりかかり、人にかみつこうとする手段なのである。

だから、賢明なる諸君は、自分の賢明さをやたらと振り回さないようにすることが大切である。それができてこそ、はじめて大事を双肩に担う力量が備わることになる。

（余説） 同じような話が、莊子（達生篇）の木鶏の故事です。木鶏とは、木彫りの鶏のように全く動じない最強の闘鶏で、道に達した人物に例えています。闘鶏を育てる名人が、鶏を預けた王の下問に答えます。「空威張りして闘争心がある状態」から「他の闘鶏の声や姿を見ただけでいきり立ってしまう状態」や「目を怒らせて己の強さを誇示している状態」を経て「他の闘鶏が鳴いても全く相手にせず、まるで木鶏のように泰然としている状態」です。かつて横綱双葉山が、連勝が 69 で止まった日の夜「未だ木鶏たりえず」と師と仰ぐ安岡正篤に打電した故事があります。最近では横綱白鵬が、これを踏まえ連勝が 63 で止まった時「いまだ木鶏たりえず、だな」と語ったそうです。

日本人には、知ったかぶりなど「才走る」ことを嫌う傾向がありますが、大切にしたい美点であるように思います。宮本武蔵の自画像からもそれが感じられます。

3 儉けんは美德なり。過ぐれば則ち慳吝けんりんと為り、鄙吝ひしよくと為りて雅道がどうを傷る。讓じょうは懿行いこうなり。過ぐれば則ち足恭すうきようと為り、曲謹きよくきんと為りて、多く機心きしんに出ず。 前集199

(意識) 儉約することは美德である。しかし、度が過ぎればけちとなり卑しくなつて、かえって立派な行いから外れてしまう。讓ることは麗しい行いである。しかし、その度が過ぎると諂いや卑屈が感じられて、何か魂胆や企みを思わせる場合が多い。

(余説) インド独立の父マハトマ・ガンジーは、禁欲生活が知られていますが、これは、幹部たちによる注意深い配慮と高額で維持されたと聞きます。また、元経団連会長の土光敏夫氏は「メザシの土光さん」の質素な生活が報道されてイメージが定着しましたが、これも放送局のやらせの部分もあるようです。

いずれにしても言志四録は教え「天下の事過ぐれば則ち害あり」「過不及有る処是れ悪なり。過不及無き処是れ善なり」とのとおり、各々の社会的な位置や影響などを考慮しながら、分に応じた質素儉約や謙讓を忘れないことだろうと思います。

(参考) 「機心」について(その意味するところは、上とはやや異なりますが)。

莊子「機械ある者は必ず機事あり。機事ある者は必ず機心あり。機心胸中に存せば、則ち純白備らず。純白備らずんば、則ち神生定まらず。」(天地第12)

(機械は便利で、さまざまなことを現出してくれるが、それに取り憑かれると万事機械的となって人間的な心を失って、とんでもない結果を招いてしまう。)

4 盈満えいまんに居る者は、水の將まさに溢れんとして未だ溢れざるが如し。切きに再さらに一滴を加うことを忌む。危急ききゆうに居る者は、木の將まさに折れんとして未だ折れざるが如し。切きに再さらに一搦いちじやくを加うことを忌む。 前集203

(意識) 物事が究極に達している状態にある人は、水が器からまさにあふれようとしてあふれずにいるようなものである。それ以上に一滴を加えることをひたすら嫌う。

追いつめられて危機的な状態にある人は、木が今にも折れようとして折れずにいるようなものである。あと一押しいっしの力が加わることをひたすら嫌う。

(余説) 「満ならいれば欠けるが世の慣な」です。富貴や名声や権力がその人の力量の極点きょくてんに達すると禍わざわいを招くという「盈満の咎とが」という故事が後漢書にあります。

菜根譚も、水と木の例えを使ってこの道理を説いています。器になみなみとつがれた水は、あと一滴でも加えるとこぼれます。今にも折れそうなほど力が加わった木の枝は、あと一押しで折れます。その一押し一滴を加えないように気をつけよとの教えです。

普通の状態ならば一押しや一滴くらいでは平気ですが、究極の状態ではそれが致命傷になります。適時・適量・適正を善とする2千年を超えて生き残った哲学です。

(参考) 菜根譚(前集64)「欿器い きは満みつつるを以て覆くつがえり、撲満ぼくまんは空くうしきを以て全まし。故に君子は、寧ろ無むに居るも有あに居らず。寧ろ欠けつに処るも完かんに処らざるなり。」

孟子(離婁章句下)「源泉こんこんは混混こんこんとして昼夜を舍あかず。科あなに盈みちて而る後に進み、四海に放はなつ。本ある者は是くもとの如し。」(根本が充実しておれば、一つ一つ段階を経て進んでいき、やがては完成するものだ。学問をするにも結果を急いで焦ってはならない。)